

書評

小菅信子 著

『日本赤十字社と皇室——博愛か報国か——』

本書は、極限状況下での二つの選択肢、「非人道的であっても上官の命令に従うか、それとも己の良心に従うか」という捕虜処遇に関する問いから始まる。生命の危機的状況のもとで、他人の、しかも敵対する人間の尊厳を守ることが果たして可能であるか。戦時体験のない読者らは、上官の命令は天皇の命令として絶対服従を強いられた先人たちの思いに近づくためには、相当の想像力が求められるだろう。問いには正解はないとしつつも、日本赤十字社が、時々の国策により揺れ動かざるを得なかった活動のありようを、皇室との深い関係にフォーカスしながら解き明かそうとする本書の命題の伏線になっている。

著者は、日本の赤十字社の際だった性格が、その前身の博愛社創設前後の「皇室と皇后の恩眷(恩顧)」によって規定された経緯についてかなりの頁を割いた。新たな知見も加わっていて興味深い。博愛社は、西南戦争において官、賊軍の別なく救護にあたった佐野常民と大給恒らの発議で創設された。「戦場の人道化」をめざす国際赤十字社の方針に依拠したとはいえ、維新直後の日本で組織を常置永続させるには、思想的にも財政的にも数多の障害があった。これを打破する上からも皇室の保護、とりわけ御簾の奥から姿を現した皇后(のちの昭憲皇太后)の、積極的で具体的な物心両面からの関与は大きい。特に、社紋にと賜ったかんざしの「桐竹鳳凰」模様で囲んだ赤い十字を社章にしたことで、十字の標章に代表されるキリスト教性への人々の抵抗感が払拭されたという。皇后の力が「異教国日本のナショナリズムに赤十字社を招き入れ国民統合の象徴装置として赤十字社を普及した」と。こうして、日清事変までの17年間を皇后を中心とした平時の救護活動に向けられたことが、国民の赤十字に対する親近感を深める一助になった。

日本独自の赤十字思想は、「報国恤兵」と「博愛

慈善」とを結合して規定された。それは、たとえ賊軍たりとも「天皇の赤子」として救うべきとの考え方によるというが、それだけではないだろう。明治政府が、近代国家をめざして列強と対峙するに当たり、天皇を国家権力の統治者として掲げた影響も強いと思う。明治の人道観により内戦時に「敵味方の別なく」が受け入れられたとはいえ、その思想が国際戦にまで及ぶものではなかった。そのことは、天皇を大元帥とする「皇軍」として、他民族を巻き添えにしながら転戦を続けた日中戦争から太平洋戦争にかけての日本軍の捕虜処遇に如実に現れている。敵の捕虜は、現人神の天皇に刃向かった者として、国際法を無視した非道な仕打ちを正当化して憚らなかった。

戦時における数々の不条理さは、中立を標榜する赤十字社にも及ぶ。一国一社の赤十字は、その国の軍の衛生部隊の補助機関であることが必要条件である。人道を掲げる赤十字活動も、国策のかなめである「忠君愛国」に先導された「報国恤兵」が、「慈善博愛」を圧倒せざるを得ない葛藤に迫られた。これを如実にしたのが、戦場で救護に当たった赤十字看護師らである。彼女らは、人道、博愛のもとに「敵味方の別なく看護する」ことを骨の髄まで叩き込まれていたが、戦場においては通用しなかった。敗走時の逼迫した生死の境でさえ、「生きて虜囚の辱めを受けるなかれ」の勅諭が先立ち、味方の兵士らの命さえ救うことができない苦悩を後年になって吐露した。

戦後の紆余曲折を経ながらも日本赤十字社は、日本国憲法に則って「戦争をしない国」の1組織として、戦時救護を行わない国際的にはユニークな赤十字社となって、災害支援をはじめ平時の業務が主流となった。だが、戦中の暗い記憶を抱えつつも創設以来の皇室との関係は揺るがなかった。連合軍駐留下の諸制約のもとで赤十字女専に入学した私の記憶でも、各種式典には、名誉副総

裁の宮妃が臨席され貞明皇后の御歌「四方の国」が歌われた。直近では、上皇后が妃殿下時代から赤十字事業、とりわけ看護に深く心を寄せられる様子に心打たれることも少なくなかった。上皇后が在位中の上皇とともに、被災地で直接住民を慰められる光景や、戦争犠牲者が眠る地への慰霊の旅をされて平和・安寧を祈念される姿は、国民の信頼感に通じることにもなったと思う。

本書は、一貫して戦争と人道化の問題を追いながら、赤十字が皇室と国民をつなぐゆるやかな装置であり続けてきた過程と意味を、著者の問題意識と史実を重ねながら文献的知見を加え考察した貴重な書である。内外の複雑な事象がからむだけ

に、その経緯を含む全容を汲みとるのは容易ではない。「正義の戦争は再び復活しつつあるのか」との問いで結ばれた最終章は、あらゆる苦痛からの解放をモチーフにする赤十字が何故、その根源となる戦争を防ぐ活動が主流にならないのか、今日の問題として、また、歴史研究の視点からも論じべき課題であると思われる。是非、一読をお勧めしたい。

(川嶋みどり)

[吉川弘文館, 〒113-0033 東京都文京区本郷7丁目2番8号, TEL. 03 (3813) 9151, 2021年1月, 四六判, 192頁, 1,700円+税]